

パネルディスカッション4(産業衛生技術研修会)

PD4-2 企業はISO45001をどのように活用するか

五十石 清

五十石技術士事務所

ISO45001は、厚生労働省指針及び、指針を基とした中災防方式、建災防方式やOHSAS18001と比較すると、次のような理由から取り組みが難しいと思われる。

- ・実際に利用するJISQ45001は、ISO45001の技術的内容及び構成を変えないように日本語とされているため不自然な表現もあり、マネジメントシステム(MS)特有の用語もあるために理解が難しい。
- ・MS規格として附属書SLに基づくルールが適用されるため、従来からの労働安全衛生のリスクに加えて経営上(システム上)のリスクもあって2種類のリスク及び機会を考慮する必要がある。
- ・厚生労働省指針やOHSASにはなかった調達(請負者、外部委託)等に関する要求事項等も加わり、QMS、EMSと比較しても要求事項が多い。

特に中小企業にとっては、厚生労働省指針でも構築・運用していく適切な人材がいらない等から取り組みが難しい企業が多かったことを考えるとISO45001は取り組みが難しい規格と言える。

ところで、ISO45001は企業が第三者認証の取得に利用できる規格として作られているが、規格作成の目的は「認証」を意図したものではないことが規格開発時から明確にされ、規格のI.適用範囲でも「この規格は、労働安全衛生マネジメントシステムを体系的に改善するために、全体を又は部分的に用いることができる」とされていることから、次のような取り組み及び活用が考えられる。

1. ISO45001を技術書としてとらえて、労働安全衛生マネジメントのレベルアップに利用する。

どの企業もMSの有無に係わらず安全衛生を考えない事業活動はあり得ない。その実施にあたりISO45001を一つの技術書と捉えて利用する。特に、附属書Aとして示されている「45001利用の手引き」には非常に多くの情報が含まれており、具体的な事例を知ることができる。なお、中小企業などで十分な資源が確保できない場合には規格の全

てを一度に対象とするのではなく、段階的に実施する活動も可能である。

2. MSの重要性を認識し、システムを構築して運用するが認証までは実施しない。

現在でも中災防、建災防方式やOHSASのシステムを構築しているが、あくまでも社内の活動と捉えて認証は受けていない企業が多数存在する。「社内の安全衛生のレベルアップが目的で、取り組みを外部まで示す必要がない」と考えれば十分に役割を発揮できる。

3. 認証を取得して確実な安全衛生のレベルアップを図るとともに、活動を利害関係者に示す。

MSの取り組みは、ややもすると自己満足に陥って改善が進まない場合がでてくる。第三者の目を活用して自社のレベルを知るとともに、他社のより良い事例を受けて改善に繋げる。更に、他のシステムも展開している企業では、統合したシステムとして無駄のない活動を行うようにする。

従来から指針やOHSASに基づく活動が確実に行われていれば、組織を取り巻く現状の理解、システム上のリスクや、調達等を除けば、ほぼ規格に対応する活動がなされていると考えられるので、システムの構築に当たっては、まず、現在の自社の取り組みを整理して規格に当てはめ、当てはまるものがない場合には、その企業に適した活動を加えていく。その場合もゼロから始めるのではなく、例えば、既にQMSやEMSなど他のシステムで取り組んでいる項目もあるので、それらを有効に利用して経営上で無駄のない取り組みやすいシステムにしていくと良い。

演者略歴

1999年まで三菱化学に勤務。その後、高圧ガス保安協会にてOHSMS、QMS、EMSの審査、研修を含むコンサルティングを実施。労働安全コンサルタント、技術士(化学)、ISO/TC283国内審議委員会委員